

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 11 月 21 日現在

機関番号：17501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520124

研究課題名(和文) 18世紀後半のイタリア諸都市とウィーンのおペラ公演におけるレパートリーの相関関係

研究課題名(英文) The Correlation among the Repertoires in the Performances of Operas at the Italian Cities and Vienna

研究代表者

松田 聡 (MATSUDA SATOSHI)

大分大学・教育福祉科学部・准教授

研究者番号：60282547

研究成果の概要(和文)：モーツァルトが活動をした1780年代のウィーンにおける宮廷劇場のおペラ公演について、同時期のイタリアの諸都市、とりわけフィレンツェ、ミラノとの比較を行い、それぞれの公演の特徴と3都市間のレパートリーの相関関係について考察した。その結果、ウィーンのブルク劇場の演目は、フィレンツェのペルゴラ劇場よりミラノのスカラ座の方がより共通するものが多く、特に80年代末期にはそれが顕著であること等が分かった。

研究成果の概要(英文)：The performances of operas at the court-theatre in Vienna in the 1780s, for which Mozart composed his operas, are compared with those of the Italian cities, especially Florence and Milan. The number of common repertoires of the Burg-theatre in Vienna and the La Scala in Milan is larger than that of the Burg-theatre and Pergola-theatre in Florence, especially in late 1780s.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：音楽学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：オペラ公演、ウィーン、フィレンツェ、ミラノ、モーツァルト

1. 研究開始当初の背景

音楽史研究は、従来の作品・作曲家中心の傾向を脱し、社会史的・文化史的側面に重大な関心を示すようになってきている。オペラ史も、例えばロジャー・パーカー[編]『オックスフォード・オペラ史』のような、オペラ劇場における公演の実態を踏まえた良質の歴史記述も出されてはいる。しかし、地域や時代を絞った個別研究は、未だ不十分な状況にある。

その中、研究代表者はこれまで、科研費「若

手研究」の補助も受け、ヨーゼフ二世(在位1765～90)とレオポルト二世(在位1790～92)の時代におけるウィーン宮廷劇場でのオペラ公演について研究を行ってきた。特に1783年4月～91年2月のイタリア・オペラとジングシュピールの公演にかんしては、Link, Dorothea. 1998 *The National Court Theatre in Mozart's Vienna* に掲載の上演日程表に基づいて考察を行い、日程の組み方の原則や特徴を明確にすることができた。

しかし同時に、ウィーンのみを研究する限界にも気が付いた。例えば、上記8年間の公演において舞台にかけられた67のイタリア・オペラのうち、ウィーンのために新たに作られた「オリジナル作」は約3分の1にすぎず、残りは主にイタリアからの「移入作」である。その移入の経緯を踏まえなければ、ウィーンにおけるオペラのレパートリーの形成過程は明らかにはならない。ところで、同じイタリアでも、上記の期間、はじめはヴェネツィア、おわりはナポリがウィーンと強くかかわっていること、また、ローマとの関係は一定していることも、これまでの研究を通じて分かってきた。そして、そこから、イタリア諸都市とウィーンとの間には何らかの限定的なネットワークが形成されていたのではないかと、という予想が生じた。これが当研究開始時の背景をなす。

2. 研究の目的

前項に示したように、研究代表者のこれまでのウィーンにかんする研究を核とし、他の都市との相互的な関係という新しい観点を導入してそれを量的にも質的にも発展させ、18世紀後半におけるオペラ公演についての歴史研究に重要な寄与をなそうとするのが、本研究の出発点である。

そこで、本研究開始時においては、ヨーゼフ二世とレオポルト二世という2代の皇帝が統治した1765年8月から1792年2月までのウィーンにおけるイタリア・オペラ公演について、そのレパートリーがイタリアの主要5都市（ナポリ、ローマ、フィレンツェ、ヴェネツィア、ミラノ）とどのようなかかわりにおいて形成されたのかを追求することが目的となっていた。

3. 研究の方法

研究を進める中で、3年という期間に5都市とのかかわりについて十分な考察を行なうのは非現実的であることが明確となってきた。そこで、中心的な対象をフィレンツェに絞って考察を進めるという方法をとることにした。

この都市を選んだのは、一義的には、ここがウィーンと特別にかかわりの深い都市であることが理由となっている。そのかかわりの深さは、何よりも、フィレンツェに宮廷を置くトスカナ大公国がハプスブルク家領であり、1767年以来大公の身分にあったレオポルトが、兄ヨーゼフ二世が没した1790年、皇帝レオポルト二世としてウィーンに移ったという事実、よく現れている。レオポルト二世は1791年にウィーンの宮廷劇場におけるオペラ公演の組織替えも行っているから、その意味合いを理解するためにも、彼がそれまで住んでいたフィレンツェの宮廷劇

場におけるオペラ公演は、まず押さえておかななくてはならない対象といえるのである。

フィレンツェを中心的な研究対象として選んだのは、また、実際的な理由もある。この都市のオペラ公演については、Weaver, R. L. and Weaver, N. W. 1993 *A Chronology of Music in the Florentine Theater 1751-1800* という、ウィーンに関する前掲のLink 1998に匹敵する、信頼できる包括的な情報源があることである。そのデータを整理することが、イタリア諸都市のオペラ公演に関する研究の出発点にはふさわしいものと判断されたのである。

そのデータを包括的にデータベース化する作業は続行中であるが、特に1783年4月～1791年2月のペルゴラ劇場におけるオペラ公演についての考察は一定の成果を出すことができたので、以下、報告する。なお、対象とする時期は、本研究がウィーンの宮廷劇場におけるオペラ公演についての理解を深めるためのものであり、ウィーンについてはまず、その時期におけるブルク劇場のオペラ公演が中心的な研究対象としてまとまりをなしていることから、必然的に導かれたものである。

この限定された対象に関して、オペラ公演の実態を明確にするために必要な統計を取り、それをウィーンと比較し、さらに演目相互のかかわりを考察する、というのが研究の方法である。

また、その考察を立体的なものとするために、フィレンツェほど詳しい最新の情報が得られないものの、ある程度の概要が明らかとなっているミラノのスカラ座における同時期のオペラ公演について、同様の統計を取り、参照した。ミラノはフィレンツェと同様に、ハプスブルク家領であり、ウィーンとのかかわりも深いものと推測されるので、参照するにはふさわしい対象であるものと判断される。なお、ミラノについての情報源は次の文献である。Cambiasi, P. 1872, *Rappresentazioni date nei Reali Teatri di Milano 1778-1872*.

4. 研究成果

(1) 公演の概要

ペルゴラ劇場は、同時代の他のイタリアにおける宮廷劇場と同様に、季節ごとに公演を行う「スタジオーネ制」を取っていた。「春 primavera」のシーズンは基本的に復活祭の翌日に始まり6月まで続いた。「夏 estate」は1784年と85年しかなく一般化できないがいずれも7月の公演である。「秋 autunno」は9月に始まり11月まで続いた。「謝肉祭 carnevale」はクリスマスの翌日、12月26日から四旬節の開始前までである。各年の各季節の演目数を表1に示す。

表 1

	春	夏	秋	謝肉祭	計
1783/84	3		2	3	8
1784/85	3	1	2	3	9
1785/86	4	1	2	2	9
1786/87	5		2	3	10
1787/88	4		2	2	8
1788/89	3		2	2	7
1789/90				2	2
1790/91	3		2	2	7
計	25	2	14	19	60

だいたい、大雑把に、春は3演目、秋と謝肉祭は2演目というのが標準的なところとしてよかろう(1789年の春から秋にかけては劇場改修のため公演がなかった)。

各季節のジャンル別内訳は表2の通りである。

表 2

	セリア	ブッフア	計
春	3	22	25
夏	0	2	2
秋	14	0	14
謝肉祭	14	5	19
計	31	29	60

基本的に春はオペラ・ブッフア、秋と謝肉祭にはオペラ・セリアが上演されたことが分かる。全体として、オペラ・ブッフアとオペラ・セリアの演目数はほぼ同数である(特に表には示していないが、この傾向について年による変化は認められない)。

なお、季節や都市をまたいで同じ演目が上演されることはほとんどなかったが、表2の60演目中、重複が3演目あり(セリア2、ブッフア1)、この時期に上演された作品数は57となる。

この作品の数で、ウィーンのブルク劇場、およびミラノのスカラ座と比較したのが表3である。

表 3

	セリア	ブッフア	計
ペルゴラ	29	28	57
ブルク	0	67	67
スカラ	20	33	53

ウィーンのブルク劇場は、「レパトリー制」を採っていること、ジャンルがブッフアに限定されることの2点でイタリアの諸都市と区別されるが、少なくとも上演した作品数

という点ではペルゴラ劇場とブルク劇場は似通っているということ是可以する。ブルク劇場では、1783年にイタリア・オペラの公演が再開し、そのシーズンには多くの演目を導入したこと、ペルゴラ劇場では1789年の2つの季節で公演がなかったことを考慮に入れば、表に表れている以上に両者の公演規模は近いと見てよかろう。

一方、ミラノはフィレンツェに比べるとブッフアの比率が高いが、これは、セリアの上演される季節が謝肉祭にほぼ限定されていたことに起因する。ただし、この違いの意味合いについては、両都市の他の劇場の公演も視野に入れたうえで判断すべきであろう。ここでは、それぞれの代表的な劇場に限定したうえでの違いの指摘にとどめたい。

(2) オリジナル作と作曲者について

ペルゴラ劇場で上演された演目は、この公演のために作られたもの(オリジナル作)とすでに他で初演されたもの(移入作)とに分けられる。シーズンごとのオリジナル作の数を、ジャンル別に示したのが表4である。

表 4

	セリア	ブッフア	計
1783/84	1	0	1
1784/85	1	1	2
1785/86	3	2	5
1786/87	0	1	1
1787/88	1	2	3
1788/89	1	0	1
1789/90	1	0	1
1790/91	2	0	2
計	10	6	16

演目全体の中で占める割合は約4分の1であるが、ジャンルによる違いがあり、オペラ・セリアが10作(全体の3分の1)に対して、オペラ・ブッフアは約半分の6作(全体の5分の1)である。また、シーズンによって全体の数はまちまちであるが、全体としての変化の傾向は認められない。オペラ・セリアについては、ほぼ毎シーズンにオリジナル作があること、(表の数字としては表していないが)秋にオリジナル作が発表されたのが4シーズンであるのに対し、謝肉祭では7シーズンとなっていることが注目される。毎年1作のオリジナルのセリアを、基本的には謝肉祭の季節に発表するという原則があったことがうかがえるからである。このあたりは他の都市の宮廷劇場と比較すべき重要なポイントとなろう。

オリジナル作の作曲者は15人を数える。つまり、一人だけ2作を作り、あとは1作の

みの作曲ことになる。その一人はプラーティ (Alessio Prati, 1750-1788) という作曲家である。彼がペルゴラ劇場のために作曲した2作のうち1作目《アウリーデのイフィジェニア》は彼のイタリア・オペラのデビュー作である。また、2作目の《ニーノの復讐》は、初演のシーズンの後、さらに2回、別のシーズンで再演されている。つまり、先に、セリアで2つ重複があると指摘したのがこれであるが、そのように例外的に取り上げられ方をしたという点からも、この時期のペルゴラ劇場と結びついて最も目立つ仕事をしたのがこのプラーティであるといつてよかるう。1788年に早世しなければ、さらにこの劇場のための作曲を行なったことも十分に考えられるのである。

なお、《ニーノの復讐》は、1791年12月、ウィーンでレオポルト二世によりオペラ・セリアが復活したあと上演された2つのセリアのうちの1つであることも注目される。

さて、以上を同時期のウィーンのブルク劇場と比較しよう。ブルク劇場におけるオリジナル作の数はペルゴラ劇場よりも多い23であるが、作曲者は12人に過ぎない。その半数の6人は複数の作曲をしている。特にサリエリの6作が際だっているが、これは宮廷劇場付き楽長や宮廷楽長としての職務として捉えることができる。ペルゴラ劇場では、この劇場のために固定的に仕事をする作曲家がいなかったという点が、ブルク劇場と際違った相違点として挙げることができる。

プラーティを唯一の例外として、この時期のペルゴラ劇場では、作曲家への依頼は単発が原則であった。様々な作曲家の音楽を公演にかけのを重視した体制であったことがここからうかがえる。このことは、個々の作曲家の経歴を検討する際にも念頭に置かなければならない事柄といえよう。

(3) レパートリーの相関性

最後に、ペルゴラ劇場、ブルク劇場、スカラ座の3劇場において、どの程度、共通する演目が上演されていたのかを検討しよう。ブルク劇場では、ジャンルがブッフアに限られていたから、他の2劇場でも、ブッフアについて特に統計を取ることにした。

作品数について、ブルク劇場と他の2つの劇場との間には、かなりの開きがある。したがって、例えばペルゴラ劇場がブルク劇場とスカラ座とのどちらにより相関性が高いのか単純に考察することはできない。一方、ペルゴラ劇場とスカラ座については、公演の様態が似通っているので、ブルク劇場との共通性という点からの比較は可能であろう。

そこで、ブルク劇場の各シーズンに導入された演目が、対象とする8シーズンにおいてペルゴラ劇場、およびスカラ座で上演された

のかどうかという観点から整理したのが、表5である。

表5

	A	B	C	D	計
1783/84	4	5	2	6	13
1784/85	3	2	2	5	8
1785/86	1	1	0	8	10
1786/87	2	1	1	7	9
1787/88	3	2	1	4	8
1788/89	0	3	0	5	8
1789/90	1	3	1	2	5
1790/91	1	2	1	4	6
計	15	19	8	41	67

A…フィレンツェと共通

B…ミラノと共通

C…両方とも共通

D…いずれにも共通しない

もちろん、共通するものについては、一方から一方に直接移入されたのか、偶然にも一致したのかなど、その背後にある事情の考察も不可欠であろうが、それは今後の課題として、ここでは演目が重なっているという事実のみに注目したい。ペルゴラ劇場でも上演された演目が15 (ペルゴラ劇場の演目中53.6%) であるのに対し、スカラ座では19 (スカラ座の演目中57.6%) であり、ブルク劇場では、ペルゴラ劇場よりスカラ座と共通する演目が上演されていたことが、まず確認できた。

しかし、シーズン別に見ると、より顕著な傾向が認められる。最後の3シーズンについて、ペルゴラ劇場でも上演された演目が2に過ぎないのに対し、スカラ座については8を数えることである。特に最後の2シーズンでは、ブルク劇場の演目11のうち、半数近い5つがスカラ座のレパートリーにもなっている。

ここでの考察は、あくまでもフィレンツェのペルゴラ劇場とウィーンのブルク劇場との関係を中心とするものであるが、それとの対比において、ブルク劇場とスカラ座との関係における以上のような顕著な特徴が浮かび上がってきたのだから、この点について、若干、補足をおきたい。

1790/91年と91/92年に導入されたブルク劇場の演目では、ナポリで初演されたものの数がそれまでと比べて際立って多いことに特徴が認められるが、そのことについては、これまで、この2シーズンに皇帝であったレオポルト二世の趣味と関連させて理解されてきた。

しかし、実際のレパートリーについては、レオポルト二世が大公として治めてきたフ

イレンツェのペルゴラ劇場との共通性は意外になく、むしろ、ミラノのスカラ座のほうとの結びつきの強さが感じられる。そして、そのことは、1791/92年にまで対象を広げると、より顕著となるのである。

つまり、レオポルト二世時代のブルク劇場のレパートリーの特徴は、皇帝自身の趣味と無関係とはいえないとしても、少なくとも皇帝が、もといいたフィレンツェのペルゴラ劇場の公演内容をブルク劇場に移し変えたという見方はできない（その点、ウィーンで復活させたセリアの公演内容とも顕著な違いをなす）。むしろ、レオポルト二世時代のレパートリーはミラノの公演とも密接に結びついて形成された可能性が示唆されるのであり、これは、今後、追求に値する課題を提起しているのである。

なお、以上の考察については、所属研究機関（大分大学教育福祉科学部）の研究紀要に論文として公表していく予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

松田聡，「《秘密の結婚》とウィーンのアペラ公演」，山田高誌（編著）『チマローザの世界』，査読無，2008年，27-31ページ

〔学会発表〕（計1件）

松田聡，「ウィーンとチマローザ—《秘密の結婚》初演をめぐって—」，日本音楽学会関東支部特別例会，2008年10月4日，立教大学

〔図書〕（計1件）

松田聡，ありな書房，『フィガロの結婚：モーツァルトの演劇的世界』，2009年，164ページ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松田 聡 (MATSUDA SATOSHI)

大分大学・教育福祉科学部・准教授

研究者番号：60282547